

触れることは

加藤文子

九畳ほどの部屋で調理、食事、接客や事務や手仕事などいろいろこなしている。

四人掛けのテーブルとイスの他、低くて細長いアフリカの木製ベッドや書棚、小物ダンス、タイルをはめ込んだスペイン製の引き出しつきテーブル、ピアノのイスなど、よくもまあこんなに……と、自分でも呆れるほど持ち込んでいる。

部屋の中央には、台所と食卓テーブルの仕切りを兼ねてくくりつけの棚がある。板を数枚横に渡した作りで、どちら側からも物が取り出せる。

上から三段目くらいまでは、陶や木製やシルバーのオブジェなど気に入った物をとりとめなく置いている。出し入れしやすい高さの四段目五段目に、日常使う茶わんやコーヒーカップや皿などの食器を並べている。

装飾的なものと日常雑器が同居しているのもオカシなものだが、食器戸棚もないので他に持って



いきようがないのだ。

物が多いわりには圧迫感がないのは、天井がなく吹き抜けのせいかと思う。

調理台もあってないようなもの。水切りカゴの前にまな板一枚置くのがやっとで、他に何も置けない。

切った野菜はボウルに入れていったん水切りカゴに置いて、工程をすすめる。そのため、調理の時は水切りカゴを物の置き場として使えるように、洗った食器は片づけておく。こまめに片づけながら調理するのも忙しいのだが、段取りを考えながらやりくりしている。

時々、こんなこともある。

出来上がったおかずのナベを食卓テーブルに移し、まな板を置き直してぬか床から漬けものを出しかけたタイミングで不意の来客があったりする。

大慌てでテーブルを空け、おかずやぬか漬けをガス台に集結させる。まな板を片づけて、空いた調理台でお茶を用意。

煮物やぬか漬けのにおいの立ちこめる中で接客、今日のおかずは…？ なあんて想像されながら会話しているのだろう。

毎日使う食器はまだしも、めったに使わない大振りの器やオブジェなどは、棚上で埃っぽくなっている。一掃しなければと思うのだが、棚からそれぞれを降ろして、拭いたり洗ったりを想うとな

かなか踏みきれない。

雨降り以外仕事ができない時が訪れると、意を決して上段から掃除をはじめ。

揚げものほしくない、凝った料理もしないのに、油っぽいよごれが付着しているものもある。

夫が昔つくった朝顔型やキノコのようなターコイズブルーの陶のコンポート、シルバーの写真立てやボンボン入れ、ひとつひとつ手にして埃を拭う。

黒ずんだ銀彩の楕円の皿、久々ハマギキ粉で研ひいてみると、ブロンズ色に被われた中から隠れていた黄色のパーツが浮かび上がる。朝やけの景色のようだ。

いつの間にか忘れていた発色に思わず感嘆の声がもれる。

高台のないゆるやかなカーブを描いた変形皿もキレイに拭いて置き直してみると、我が家のギャラリーに展示してみてもはどうだろう、チョコレート載せてみるのも可愛らしいナ、そんな気も起きる。

終了後の棚は飾り方も自然に変わって、全体が明るくなって新鮮に映る。

触れることは、対象をより鮮明に感知する上でも大切なこと。事を終えたあとの心地良さにひたりながら抱く思いである。

億劫がらずにネ、忘れなさんなヨ、この気持ちを……。



棚上のコーヒーカップ